

Title	Atlas zur deutschen Geschichte der Jahre 1914 bis 1933, hrsg. von Dr. Johann v. Leers u. Dr. Konrad Frenzel, 1934
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.158(336)- 162(340)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

Atlas zur deutschen Geschichte der Jahre
1914 bis 1933, hrsg. von Dr. Johann v.
Leers u. Dr. Konrad Frenzel, 1934.

プツゲルの歴史地圖の續きとして便利に使用せられる。世界大戦及び戦後のドイツ中心、ヒットラー主義の濃厚に表示せられた歴史地圖である。大戦に關する諸地圖を始め、一九一二年以後昨一九三三年に至るまでのドイツ國會議員總選舉圖、諸統計、年表等が收められてゐる。その傾向を示すべく左にドイツ側から見た戦争責任論に關聯せる年表の田中荆三君の反譯を掲記して置かう。四六倍版四十二頁。時價三圓五十錢。(間崎万里)

戦争の發頭人は誰か

包圍と戦争準備により之を導いたものは、協商諸國であつた。

一 ドイツの包圍

一八六六 ドイツ統一戦争。プロシヤ、オーストリアを破る。
一八七〇—七二 ドイツ統一戦争。強勢となつたプロシヤ・ドイツのフランスとの對立(『サドワ』「ケーニヒグレイツ」の復讐。『そこではオーストリア人が打破られたのだ。それがフランス人に

何の關係があらう。)

一八七二・二月八日 獨逸帝國の建設。

五月二〇日 フランクフルト平和條約。エルザス・ロートリンゲン、ドイツに還る。四十億マルクの償金。フランスは容易に三年間に支拂ふ。

それ以來フランスのドイツに對する復讐心。(ルヴァンシユ)

一八七六・七月 ベルリン會議、露土戦争を終る。獨逸間の疎隔。

一八七九・七月 ビスマルクによる獨逸間の再保險條約(締盟國の防禦戦争の際に於ける中立)。

一八九〇 ウイルヘルム二世(カプリヴィ)による再保險條約の廢棄。

ロシアのフランスへの容易なる接近(一八九一—一九三)。

一八九二 フランス艦隊のクロンスタット訪問。

一八九三 ロシヤ艦隊のツーロン訪問。

一八九四 日支間の下關係條約。日獨間の不和(日本の希望せる戦利品に對する列國の抗議)。

一八九九—一九〇二 獨英同盟交渉の不成功。

一九〇三・二月三日 日英同盟。

一九〇三 ロシヤのニコラス二世とウイルヘルム二世のレヴァルに於ける會見。

一九〇四・四月八日 英佛協商。

一九〇四・六月 イギリスのエドワード七世とウイルヘルム二世のキールに於ける會見。

一九〇五・七月三日 ニコラス二世とウイルヘルム二世のピョルケに於ける會見(防禦同盟の試み。不成功)。

一九〇六 エドワード七世とウイヘルム二世のホンブルグに於ける會見。

一九〇五—一九〇六 モロッコの危機。ロシア、フランス、イギリスのドイツに對する後の三國協商の發端見ゆ。

一九〇七 オーストリアをドイツ(三國同盟)から分離せんとするエドワード七世のウイenna訪問(不成功)。

一九〇七・八月三日 英露協商。ヨーロッパの勢力均衡亂さる。三國協商が三國同盟(ドイツ、オーストリア、イタリー)より優勢となる。

一九〇八 ボスニアの危機。オーストリア・ハンガリーのボスニア・ヘルツェゴビナ併合。ロシアの脅威的干涉。ドイツ、オーストリアを掩護す。

一九〇八 ドイツの艦隊を奇襲してポメラニアに上陸せんとする英國海軍々令部長フィッシャーの提案。

一九〇八 エドワード七世とウイヘルム二世のタウヌスのクロインベルグに於ける會見。

一九〇八 ロシアとのバルト海協約、イギリスとの北海協約。和解。

一九〇八 プラীগに於ける汎スラヴ主義者大會。オーストリア・ハンガリーに對する反抗。ロシア、セルビヤを煽動す。

一九〇八 レヴァルに於けるエドワード七世とニコラス二世の會見。ドイツに對する包圍政策の頂點。

一九〇九 獨佛間のカサブランカ條約。和解。

書評

一九一〇・二月四日 獨帝と露帝のポツダムに於ける會見。露獨協商は英佛の抗議により不成立。

一九一一 フランスのモロッコ占領。モロッコ條約(アルヘシラス決議書違背)。イタリーのトリポリ占領。世界戦争の危機。伊土戦争後の和解。

一九一二 英獨協調の最後の試み(ホルデン卿のベルリン交渉)。フランスに阻害さる。

一九一二 英佛海軍協約。イギリス艦隊は英佛海峡のフランス沿岸の防禦を引受け、フランス艦隊は地中海の防備に當る。

一九一三・七月 バルチックの港に於てニコラス二世ウイヘルム二世に平和の條約を要求す。同時に露佛參謀本部の對獨戦争についての會談。

一九一三・七月二日 露佛海軍協約。フランスは地中海の防備に當り、ロシアの黒海に於ける覇權を承認す。

一九一三・二月四日 第一回バルカン戦争。トルコ對ギリシヤ、セルビヤ、モンテネグロ、ブルガリヤ。

ロンドン大使會議並に平和會議。ロシアのオーストリアに對する戦争の脅威。ドイツとイギリスは平和を保護す。

一九一三・五月三日 ロンドン平和條約。第一回バルカン戦争終る。

一九一三・六月六日 第二回バルカン戦争。ブルガリヤ對セルビヤ、ギリシヤ、ルーマニヤ、トルコ。オーストリア、セルビヤ間の危機。ドイツ戦争を防止す。

一九一三 ブルガリヤの敗北。八月二日 アカレスト平和條約。九月元日 コンスタンチノーブル平和條約。二月四日 アテネ平和

條約。一九二四年三月九日、コンスタンチノール平和條約。第二回バルカン戰爭終る。

一九三〇 ロシヤ常備軍を百五十萬に増加す。フランス三年兵役法を採用す。同様に、一九一二年と一九一四年の間に、ドイツとオーストリア以外の大部分のヨーロッパの諸國は（ベルギーを含む）その軍備を著しく増加す。ドイツの軍備擴張案否決さる。

一九三三 ジョッフル一行のフランスの派遣員ロシヤの軍備を査閱す。フランスはロシヤの軍備擴張のため二十五億の公債を許す可す（合計二百億以上）。

一九三三秋 スペイン三國協商國に味方す。
一九四〇春 ウイルソンは軍縮案を携けてハウス大佐をヨーロッパに派遣す。この努力はイギリスの反對により失敗す。合衆國は反對側に附す。

一九二四・二月三日 ロシヤ政府は世界大戰を決意す（閣議に於ける海峡占領の決議）。

二 戰爭準備

所謂『平和的』フランス

一九二四年のドイツの平時定員は人口の一パーセント。
一九一四年のフランスの平時定員は人口の二パーセントであつた。

豫備、後備兵は

	ドイツ	フランス	フランスの超過數
一九二〇	四九九、七九人	五五五、五八人	五五、五九人
一九二一	五三三、七四八人	七二七、五三三人	一九四、七九八人
一九二二	五六一、五〇〇人	六五九、四四〇人	二一七、九四〇人
豫備兵の演習日數			
ドイツ		フランス	フランスの超過數
一九二〇	五、九六〇、七六〇日	八、一三三、二五三日	二、一七二、四九三日
一九二一	六、一六三、三〇三日	二、〇八五、八七七日	四、九三三、六五五日
一九二二	六、三三三、二八〇日	九、七〇六、四三〇日	三、三五四、一四〇日

フランスは、一九一三年の三年服兵制度採用後、その人口はドイツのその三分の二に過ぎないのに、教育を受けたる兵士數はドイツよりも二十萬餘超過してゐる。

所謂『平和的』ベルギー
ベルギー軍隊の平時兵員。

一九二七	四八、〇〇〇人
一九二四	五八、〇〇〇人

パリ駐在ベルギー大使館附武官コロロン少佐は一九一三年八月ドイツ大使館附武官フォン・ウィンターフェルトに向ひ、ベルギーに於ては獨佛戰爭勃發の際はフランスの軍隊が即時ベルギーに侵入するであらうと思つてゐると公言した。

所謂『平和的』イギリス

ロシヤの大臣サゾノフは一九一二年のイギリスに於ける彼の商議について報じてゐる。問題になつてゐる状態が出現するに至れば、すべてを賭してドイツの優越權に目覺しい打撃を加へるであ

らうとグレイは躊躇なく明言したと。

ロンドン駐在ロシア大使ベンケンドルフ伯とサー・エドワード・グレイとの會談。イギリスはロシアに味方して即時參戰すべきことを假定としてほめかしてゐる。

即ち「一、この戦争はフランスの活潑なる干渉により一般的戦争となるべきこと、二、攻撃の責任を敵に負はせること。……」「戦争責任の捏造！」故にオーストリアとドイツの政策の攻撃的性質を及ぶ限り明白ならしむることが必要である。』

所謂『好戰的』ドイツ

一九一三年ドイツの軍備擴張は帝國議會に於て否決された。

三 開 戦

一九二〇月三日 ロシヤ政府、世界戦争を決意す。

一九二〇春 協同行動のため英佛露間の定期大臣會議。

一九二〇六月六日 大セルビヤ國民主義者によりサラエヴォに於けるオーストリア皇儲の殺害。

一九二〇七月 セルビヤ政府のオーストリアに對する煽動的發表。

一九二〇七月三日 四十八時間の回答期限附オーストリアのセルビヤへの最後通牒。

一九二〇七月一日—三日 露都に於けるポアンカレとヴィヴィアニ。

露佛同盟義務の確認。

一九二〇七月二日 ロシヤ西部に於ける動員準備（戦争準備期）。

一九二〇七月五日 セルビヤ軍隊の動員。

セルビヤのオーストリアに對する回避的の提出。

オーストリアのセルビヤに對する外交關係決裂。ロシヤ、オーストリアの危機。

セルビヤに對しオーストリア軍隊の豫定の動員。

ロシヤは全國に向つて戦争準備期を布告す。

一九二〇七月五日と六日 平和維持のためドイツの仲裁の試み。この努力はイギリス・フランスのために失敗す。

一九二〇七月七日 イギリス艦隊の集合報せらる。

一九二〇七月六日 オーストリアのセルビヤに對する宣戰布告。

ニコラス二世の明白なる否認にも拘らずロシヤに於ける總動員の準備。

一九二〇七月九日 イギリス艦隊戦争位置につく。フランスはロシヤにその同盟の援助を保證す。ロシヤはオーストリアに對し公けに十三個軍團を動員し密かに全軍隊を動員す。ウィルヘルム二世の電報に基づき露帝の總動員の撤回。この命令は行はれなかつた（スコムリノフ、サゾノフ、ヤヌスケウイチ）。ドイツの警告に拘らず、ロシヤの動員は進行す。

一九二〇七月九日 ベルギーの動員。

七月三日夜刻 ドイツ艦隊の保安状態 (Seherheitszustand) 命ぜらる。ドイツの壓迫にオーストリアは讓歩し、セルビヤの無危害保證さる。戦争の回避が表面確實らしい。イギリスは調停に努力し、

ロシヤとフランスは戦争に努力し、ロシヤは動員を進めた。

七月三日朝 ロシヤ總動員令の發表。

七月三日正午 ドイツに於ける臨戰危險状態の布告。

七月三日午後 ドイツの對露最後通牒。總動員令の撤回要求。
 イスヴォルスキー(ロシヤ)はロンドンとパリに於て之
 を知れるにも拘らず、オーストラリア讓歩の報道を否認す。
 七月三日夕刻 フランスの社會黨首領ジョーレス(平和論者)
 パリに於て殺害さる。

七月三日夜 フランスは戦争を決意す。

七月三日 ドイツよりフランスの態度に對する質問。

八月一日 フランスよりの不満足なる同答。

八月一日一五時四五分 フランスの動員令下る。

八月一日一七時 ドイツの動員令下る。

八月一日夕刻 西部及び東部に於ける敵對行動開始。

八月一日夕刻 ドイツのロシヤへの宣戰布告。

八月二日 アルトミュンステロール(上アルザス)に於けるフラ
 ンス人の國境侵入。

八月二日 イギリス艦隊の動員。

八月二日 ドイツ軍のベルギー通過承諾の懇願。拒絶。

八月三日 ドイツ軍隊のベルギー侵入。

八月三日 ドイツのフランスへの宣戰布告。

八月四日 ベルギーの中立を『侵犯』せるためイギリスのドイ
 ツに對する最後通牒。

八月四日 イギリスのドイツへの宣戰布告。

ドイツは事實平和を脅かしたであらうか？

三十年戦争(一六一八)の初勃發以來一九〇五年迄に、

フランスは戦争年數四〇年の間に十四箇國に對し全戦争
 イギリスは戦争年數三三年の間に十二箇國に對し兇戦争
 ロシヤは戦争年數二五年の間に十一箇國に對し三戦争
 ドイツは戦争年數三三年の間に八箇國に對し三戦争
 を行つてゐると。(田中判三)

ヴォルフ民族文化史 (間崎万里譯) (刀江書院發行)

凡そ世界史上の興亡を論ずるものは、その第一步に於て自己の
 立場を鮮明にするの要がある。これ世界史の使命が少くともその
 一面に於て啓蒙的なるものを含む故である。世界史を描くものが
 徒らな公平無私を拒け、時には科學的立場を棄て去つてまでも是
 非善惡、正邪曲直を論ぜんとするが如きは實に此處に由來するも
 のである。彼は最早や歴史家にあらず、史論家である。それ故、
 史論家の責務は先づ鮮明な豊富な確乎たる自己の立場を築き、次
 でその立場から利用し得らるる史料を縦横に驅使して論旨の貫徹
 を圖るべきである。其處に長所も生まれれば、短所もまた自らこ
 れに伴ふであらう。見方によつてはその長所の大きい程、その短
 所が甚しいかもしれない。これに接するもの、同ずるものは贊意
 を表し、難ずるものは否定を重ねるであらう。人、各々の立場で
 ある。

今春、間崎教授が譯出されたヴォルフの民族文化史は斯うした
 世界史の特徴を最もよく具現せる書物である。「ドイツの國土にし
 て勇敢なる闘士トライチケとハッセ」の傳統を汲む國粹論者の